稲葉默斎の『先達遺事』の特質について

大久保　紀　子

はじめに

稲葉默斎は江戸時代中期の儒者である。佐藤直方の門人であった父、稲葉迂斎および野田剛斎に学び、後年、現在の千葉県山武郡大網白里町に移り住んで農民に儒学を教授した。默斎がそこで育てあげた門人達の学派は上総道学と呼ばれ、その学統は昭和三十年代まで続いていたことが知られている。

稲葉默斎はまた、山崎闇斎学派の儒者伝である『先達遺事』を著した。『先達遺事』の魅力は、儒者達の気象が活写されている点にある。默斎が儒者達の姿を生き生きと再現し得たのはもちろんその文才によるが、『先達遺事』の意図から必然的に招来された結果でもあった。默斎は、父や諸先輩から伝え聞いた先学の言行を題材として、そこにあらわれている儒者の気象を後世に伝えようとした。一般的な儒者伝のように伝記的な事項や学論、業績を記すのではなく、儒者の一挙一動、片言隻句に儒者の気象をさぐりあて、それを伝えることを目的としているのである。ゆえに、『先達遺事』には、分析され整理された儒者像ではなく、儒者の気象を端的に表す生の言行が記されることとなった。読者は、儒者達の一挙一投足、一言一言からその気象を感じとり読みとっていくのである。そのために默斎は「伝神写照」の筆力を駆使したのであり、そう考えれば、『先達遺事』に記された儒者達が精彩を放つのは当然のことであった。

默斎は『先達遺事』著述の意図と方法について次のように述べている。

> 諸先達の風韻気象、或いは言、或いは行、各自物表に高踏する者は、家伝・語録の外、人の口碑に在ること久しければ則ち之れを失ふ。仍りて旧聞を蒐輯す。若し夫れ議論は則ち六経の支流、語孟の余波、駿逸取るべしと雖も、玄黄略して可なり。一段の奇快、以て人に語り難き者に至りては、豈復思量の能く解する所ならんや。而して伝心写照の妙、正に阿堵一点に在り。彼の守文の徒、俛焉佔畢して、思ひを斯に致さざるは何ぞや。余、此の編を撰し、兼て待つて有るの意を寓す云。
>
> （『先達遺事』、一頁）

默斎は口づてに伝えられている先学の「風韻気象」がやがて失われていくであろうことを惜しみ、それを記録して遺そうとした。默斎によれば先学の「風韻気象」は、その「物表に高踏する」言行にあらわれている。細かい議論は二の次であって、この「風韻気象」をこそ記し遺さなければならない。しかし、それは言語による理解や思量を越えた「一段の奇快」であって、「守文の徒」がするように字面だけを追って理解できるようなも

のではなく、「伝心写照の妙」によってのみ表現され得るものであると默斎は考えていた。

默斎が表現しようとした先学の「風韻気象」とは、一言でいえば、超俗の気象である。この「物表に高踏する」超俗の儒者と対照されるのが、右の引用文にあるように瑣末な議論に終始したり、字面にとらわれて本質を見抜くことができない器量の小さい儒者、つまり俗儒である。默斎は、型どおりにこぢんまりとまとまった俗儒達を批判する意味を込めて、先学の型破りな超俗ぶりを描き出す。『先達遺事』が一般的な儒者伝には見られない儒者の逸脱した姿を描出するのはそのためである。たとえば、貴顕の面前でなお頭巾をとらない闇斎の簡傲な態度を、また愛妾をともなって舟遊びする荻野重祐を、そして日に醇酒を飲んで楽しむ直方の姿を生き生きと描き出すのである。

こうした型破りな行為や態度を儒学の文脈の中に位置づけるとすれば、「狂」、あるいは「洒落」ということになる。事実、『先達遺事』には「狂」の気象、「洒落」の気象をあらわす逸話が多い。もちろん、他の儒者伝と共通する謹厳実直な儒者の言行も記録されてはいる。しかし、これとてもあまりに謹厳実直にすぎるために超俗の域に達している場合が多く、それはむしろ「狷」と呼ぶにふさわしい。[1]

このように、『先達遺事』の特色は、一般的な儒者伝では扱われることの少ない「狂」と「洒落」の気象を扱っている点にある。儒者といえば、品行方正、謹厚実直な姿を思い浮かべるのが一般である。しかし、默斎はそうした儒者像を俗儒として一蹴し、「狂」あるいは「洒落」という気象から生まれる超俗の言行に儒者の本質を見るのである。なぜならば、「狂」あるいは「洒落」とは、理を聖人なみに明確にとらえ得た者の謂であり、その超俗の言行は、世間一般の規準によらず理を絶対的規準とするところから生ずるものだからである。

本稿では、『先達遺事』にあらわされた「狂」と「洒落」の気象について具体的に考察することによって、『先達遺事』の特質を明らかにしていく。

一　「狂」の気象

はじめに「狂」および「狂簡」の概念を明らかにし、次に『先達遺事』からこの気象を表す逸話をあげて、内容を具体的に把握しながら考察を加えていく。

1「狂」および「狂簡」の概念

「狂」[2]は、朱注に「狂は志極めて高くして行ひ掩はず」[3]と述べられている。「志」とは聖人を目指すことである。「狂」はその卓越した知力によって理を精度高く認識し、志を高くもって理の体現者である聖人たることを目指す。しかし、知力がきわめて高い水準に達しているが故に行がそれに追いつかない。高い知力によって目指すべき理を正確に把握してはいるが、行がともなわないために未だ聖人たり得ない者、それを「狂」と言う。

「狂」はさまざまな側面をもつ。「狂」はその知力によって理が絶対的な規準であることを明確に認識し、あくまでも理を絶対的規準とするが故に、世間一般の規準や世俗の瑣事から完全に自由である。それが度量の広さと超然たる風采を生む。「古の狂」の「肆」はこうした「狂」の気象をよくあらわしている。「肆」とは『論語』陽貨「子曰古者民有三疾」章の朱注にあるように「小節に拘わらざるの謂」である。[4]「古の狂」はこの美徳を備えていた。しかし、そのこだわりのないおおらかさが単に人ののりをこ

えた行為をなすだけである場合、それを否定的に評価して「蕩」という。

また、「狂」はあくまでも理を絶対的規準とするが、そのために世間一般のことがらは完全に相対化されてしまうことになる。その覚めた視点が世間を軽視する態度や行為を生む場合がある。聖人であれば、理を悉知していることがそのままその場にふさわしい自然な態度や行為に結実していく。しかし、「狂」は知的には聖人の域に達しながら行がともなわないために、その不均衡がまま跛行を呈するのである。

次に、「狂簡」とは、「狂」の粗略な側面を強調して表す言葉である。「狂簡」は、朱注で「狂簡は志大にして、事に於いて略なるを言ふ。[5]」と定義されている。「狂簡」とは、理という高い目標を目指すが故に細かい点が粗略になっている状態を言う。「狂」の粗略な面を強調して「狂簡」と言う。「狂」に見られる粗略な面を肯定的に評価すれば「肆」ということになる。

2「狂」の具体例

『先達遺事』の文中には「狂」という言葉はなく、明白に「狂」として言及されている人物はいない。しかし、「狂簡」に類する「簡傲[6]」な行為は『先達遺事』の各所に見いだされる。また、『先達遺事』の情報源の一つである『雑話筆記』、および『先達遺事』と同じ内容の逸話を数多く収録している『迂斎先生学話』を援用することによって、永田養菴、佐藤直方、梨木祐之らが「狂」の資質をもつ人物としてとらえられていることがわかる。[7]

(1)「狂」の基本的な性格を示す例

「狂」の要件の一つは一般的な水準をはるかに超えた知的能力を持つということであった。『先達遺事』には知的に優れた人物がたくさん取り上げられているが、群を抜いて優れているのが永田養菴である。養菴は「精析、極めて通爽[8]」たる俊才であった。闇斎は保科正之から『三子伝心録』を会得する者は誰かと問われて「福山の永田養菴、其の人なり[9]」と答えているし、直方も「ヲレガ一生人ニ出合フタガ永田養菴ガ様ニウツル者ハナシ[10]」と述べている。

「狂」のもう一つの要件である行がともなわない点についてはどうかといえば、『先達遺事』の黙斎の記述をてがかりとして、養菴が易学で理に肉薄し得てはいたが「下学」はおおまかであったことを知ることができる。黙斎は『若林語録』、つまり若林強斎の語録である『雑話筆記』から引用して、養菴が「曽点底」の人物であったことを伝えている。

> 『若林語録』に云ふ、「養菴の人と爲り、亦只曽点底なり。又、能く易学に通じ、退渓の未だ会得せざる処を養菴は多く整頓し了はりぬ」と。
>
> （『先達遺事』、九頁）

「曽点底」の人物であると記されていることから、養菴が「狂」の資質をもつ人物であることがわかるが、黙斎が引用している『若林語録』、つまり『雑話筆記』の原文をみてみると、それが具体的に明らかになる。

> 然ルニ此永田ハ、気象ガ曽点ガヽリナ人デ、其得處カラ易学ニ達シテ、朱子後、李退溪ナドモスマナンダコトヲ、此永田ガ埒明ケラレタコトガイクラモ有」之候。但易学デ全体ガ抜ケ切タコトヂヤニヨツテ、反ツテ下学窮理ノ筋ハスンド大マカニアツタトキコヘ候。
>
> （『雑話筆記』、八六頁）

養菴は易学によって「全体ガ抜ケ切タ」人物である。つまり、主として形而上の分野を学ぶことによって理を豁然と会得した人物であった。そのため、一般の人が儒学の最初の階梯として習得するような「下学」、例えば『家礼』あるいは『小学』で習得するような実践的な学問は「大マカ」であった。これによって、養菴が知にすぐれて行はおろそかであるという「狂」の資質を備えていたことがわかる。

(2)「古の狂」に該当する例

養菴と並んで抜群の知的能力を認められているのが梨木祐之である。默斎は両者を「永田養菴は道学に見るところ有り、梨木祐之は神道に発するところ有りて、俊異卓絶たること、当時其の右に出づる者無きなり」[11]と並称している。梨木は、知的に優れているだけではなく「其の人となり、清爽」[12]と評され、「古の狂」をしのばせる屈託のない気象を持ち合わせていた。たとえば、次のような逸話がある。

人有り、梨木三位に問ふ、「神道の臨終に亦復密付有りや不や」と。三位居然たること良久しくして、手に問者の衣を援く。問者、揖して膝前に進めば、三位微吟して云ふ、「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と。

（『先達遺事』、九頁）

梨木は「議論明決なり」[13]と評される人物であったから、「神道の臨終」の秘訣について議論することは容易なはずである。しかし、それをあえてせず、いや、むしろ「議論明決な」る人物であったがゆえに、「良久しく」して悠然と「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と答える。

俗儒であれば蘊蓄を傾けて議論を重ね、排仏に徹する旨を力説するであろう。しかし、梨木は肩の力の抜けきった風狂な応答をし、それが何ともいえないおかしみを醸し出している。こうした余裕たっぷりの応答は、梨木が深い学識を備え、かつ小節にこだわらない度量の広さをもっていたからこそなし得た応答である。この気象を儒学の言葉で表現すれば「古の狂」ということになる。

佐藤直方も「古の狂」の気象の持ち主であった。佐藤直方は「資性英発」[14]、「俊異快爽」[15]と評され、その知力によって「道体を洞見す」[16]といわれた。『先達遺事』が描出する直方の講義のありさまは、直方が高い知力をもち、俗世間の規準にとらわれない型破りな気象、つまり「古の狂」の気象の持ち主であったことよく伝えている。

最初に、直方の講義と三宅尚斎の講義のありさまを比較している逸話をあげる。増山侯とは、直方、および尚斎に学んだ長島藩主、増山正任のことである。

佐藤の書を講ずるや、理を言表に抜き、訓詁事実に至れば則ち亦忽ち略す。尚斎の増山侯の坐に在るや、『中庸集略』を講ずること尤も詳密、字字句句、苟くも遺さず。

（『先達遺事』、二二頁―二三頁）

直方の講義は、語句の分析や個々の細かい事実に基づいた論証を積み重ねていくのではなく、理そのものを直につかみ取って示す講義であった。それに対して、尚斎の講義は「詳密」で、「字字句句、苟くも遺さず」に細かく論証していく。

直方の講義は、特別な資質を持つ者だけがなし得る講義である。優れた直感によって対象を鷲づかみにし、それを巧みな比喩によって表現して聴く者を魅了する。一方、尚斎の講義は分析と実証を積み重ねて周到に説明していく学術的な講義である。増山侯は直方の講義を「讃述」[17]していたが、

直方の死後、尚斎の講義を聴くようになってからは退屈するばかりで「欠伸に堪へず、遂に学を厭ふ」[18]ようになった。

直方のこうした直感的な知力の高さは「狂」の資質を感じさせる。この予見にたがわず、『先達遺事』には、直方の講義中の「狂」の行為を記した逸話がある。

佐藤翁、土井侯に至りて講談する毎に、侯、必ず酒を置くも、左右嘗て置くを遺る。談、既に酣、翁、直ちに侍者に命じて輙ち一椀を引き、又前話を理す。雄弁懸河、譬喩涌くが如し。侯、覚えず席を前む。

（『先達遺事』、二二頁）

直方は飲酒しながら講義する。ある時、側近が酒を用意するのを忘れたことがあった。直方はみずから酒をもって来るよう命じて一椀を引き、さらに口跡なめらかに「雄弁懸河、譬喩涌くが如」き講義を続けた。

講義中の飲酒は「蕩」の行為とみなされかねない。しかし、それが増山侯の向学心を満足させ、増山侯をして直方を「欽慕歎称」せしめたのは、直方の行為が単なる酔狂ではなく、道体を洞察した「古の狂」の行為だったからである。

(3)世を愚弄する「狂」の例

1の「狂」の概念で述べたように、「狂」は世間一般の事柄をすべて相対的なものとみなし、軽視する場合がある。「狂」のこうした側面をよくあらわしているのが、荻野重祐である。荻野重祐は黙斎によって「サテモ力ハアリ、見識アル男ナリ」[19]と評されてはいるが、その知力は永田養菴や梨木祐之のような抜群の水準にあるとは言い難い。彼の行為や態度の特色は、それらが示す知力の高さにではなく、超俗の姿勢を一徹に守って譲らなかった点にある。そのため、彼はむしろ「狂狷」であるといわれる。[20]確かに、彼の行為や態度は、知的水準が今一つであるが故に梨木祐之や闇斎、直方にみられる悠然とした風格を欠き、垢抜けないあざとさが目につく。しかし、その分、「狂」の持つ極端さが端的に表れていることも事実である。

荻野は佐藤直方に信服し「佐藤子を一見してより、天下万物を視ること児戯の如く終身放言して一世を愚弄」[21]したといわれている。彼は、世間体を保つことに汲々とする俗儒をあざ笑うかのように、次のような狂態を誇示する。

荻濃重祐、愛妾を携へて舟を泛かべ、遊観す。郷人大いに異議を為せり。

（『先達遺事』、一七頁）

こうした毒々しい狂態は、『先達遺事』に先だって書かれた『處士越復傳』にふんだんに見られる。[22]しかし、『先達遺事』では、荻濃重祐の例以外はこのような例はみられず、むしろ「狂」の悠然たる側面、つまり「古の狂」の気象をあらわしている例が多い。

(4)「狂簡」の具体例

「狂簡」の典型を示すのは闇斎である。闇斎の志は非常に高く、尋常ならざる気迫をもって学んでやまなかった。しかし、それ故に細事には粗略で、それがよく言えば豪放、悪く言えば傲慢な行為や態度を生むこととなった。黙斎は福山藩の家老の面前でなお頭巾をとらなかった闇斎を次のように描写している。

闇齋は挺達簡傲なり。嘗て福山の家老宅に到る。佐藤直方、従ふ。闇斎、頭巾を戴きて門に入る。其の家、最も貴顕なり。主人、諸大夫と出でて庁庭に迎へ、家臣数人、砌下に伏拝す。永田養菴も亦在り。闇斎、尚ほ頭巾を脱せず、左右を目し養庵を呼びて云ふ、「好天気、好天気」と。傍らに人無きが若し。

頭注　頭巾は礼冠と同じからず。燕服なり。人に遇へば以て之れを脱するを礼と為す。

（『先達遺事』、七頁―八頁）

闇斎は悠然と邸内に入り、主人の面前でも「尚ほ頭巾を脱せず」、暢気に養菴に話しかける。闇斎は礼を知らないのではない。むしろ、凡俗の水準をはるかに越えた高さで理を確かにとらえ、理からはじまる体系全体を熟知している。しかし、「狂」の粗略さ故に、簡傲な行為に逸脱してしまうのである。

この逸話は『迂斎先生学話』にも収録されている。迂斎が直方から直接聴いた逸話を默斎がまた聴きして『迂斎先生学話』に書き留め、さらに表現をかえて『先達遺事』に転載しているのである。『迂斎先生学話』では、この逸話の最後に「直方ノトフモ笑止千萬テ成ラナンタトイヘリ。直方曰先生モアレテ不遠慮カ無レハ賢人ナリ。」という文が付け加えられている。[23]「無遠慮」とは、つまり「狂簡」の属性である粗略のことである。直方は闇斎を、知にすぐれ、その粗略な面さえ克服されれば、聖人とは言い得ないものの「賢人」であると考えていた。闇斎はその粗略な面が克服されて知と行の均衡が保たれれば「聖賢」の部類に入る人物であった。その意味で「狂簡」の典型なのである。

この逸話では闇斎独特の居傲な態度が表現されているが、あくどさはない。むしろ、世間体にとらわれない闇斎の飄々とした姿が笑いをさそう。実際、直方も「笑止千萬テ成ラナンタ」と述べていた。梨木祐之の例でも、またこの闇斎の例でもわかるように『先達遺事』の「狂」の姿には何ともいえないおかしみが漂っている。

3『先達遺事』の「狂」

(1)「古の狂」の風采

以上、『先達遺事』にあらわされた「狂」の具体例をみてきた。中には荻野重祐の例のように、鋭く毒づくような「狂」の例もあるが、それは『處士越復傳』の残映というべきものであって、その数は少ない。默斎が「狂」の姿を借りて描出しようとしたのは、理を洞見し得た者だけがもつ並外れた風采であったと考えられる。2であげた梨木祐之、佐藤直方、山崎闇斎の行為は、型やぶりな、儒者としては逸脱した行為である。それが容認されたのは、彼らが道体を洞見した者だけがもつ破格の風采を備えており、それが理屈抜きに周囲の者を圧倒したからである。

彼らの風采の高さとは、つまり彼らが認識し得た理の高さにほかならない。儒者の風采の高さはその儒者がとらえている理の精度の高さと比例するのである。「狂」が理を本来の高さでとらえ得た者の謂であるとすれば、「狂」は極めて高い風采を備えているということになる。默斎は「狂」の言動を借りて、この極めて高い風采を写しとろうとしたのである。この高い風采を備えた者を「古の狂」という。梨木祐之の悠然たるさま、佐藤直方の自由闊達な姿は、「古の狂」の小節にこだわらない、おおらかな気象と重なり合う。

そうした風采を分析して説明することはできない。默斎が述べていると

おり、一言一句、一挙一動を「伝心写照の妙」によって写しとり、そこに風采が香り立つように表現するしかないのである。俗儒が拘泥する字句や議論の次元を遙かに超えたところに「古の狂」の風采はある。「古の狂」の境地にあっては学問もまた修養も俗でしかない。それほどに俗を高踏したところに得られる「古の狂」の風采を『先達遺事』は描き出そうとしているのである。

(2)「狂」によって表現された「狂」

『處士越復傳』にあらわされた「狂」には知と行の不均衡から生まれる緊張感が満ちていた。自己の内面においては、理を高く求めれば求めるほど知と行の懸隔が大きくなり、かくあるべき姿と現実の姿との乖離が緊張を生む。目を外に向ければ、理を規準とする者には耐えられないような俗の世界が広がっている。「狂」は理を水準高く把握しているが故に自己ともまた世界とも折り合うことができない。その緊張の果てに狂態をおかすのが『處士越復傳』にあらわされた「狂」の姿であった。

2の(3)の荻野重祐の例にこの傾向がみられるものの、『先達遺事』の多くの「狂」はこうした緊張感とは無縁である。梨木祐之の悠然としたかまえや闇斎の飄々たる姿は何ともいえないおかしみを湛えている。このおかしみは、他の儒者伝には見られない『先達遺事』の特色である。

このおかしみの由来や性質を説明することは困難であるが、ただ一つ言えることは、黙斎自身が儒者というものを対象化し、その生態を笑う視点をもっていたということである。

儒者の生態を笑うという黙斎の視点は、一つには方法論上から自然に生まれた結果であった。『先達遺事』は聞き書きをもとにして記された。黙斎は当事者ではなく、第三者として先学の姿を伝え聞いているのである。父迂斎や諸先輩を囲んで先学の逸話を聞く席では、嘆賞の声とともに笑い声が絶えなかったであろう。そうした状況が、黙斎に儒者の生態を笑う視点を与え、『先達遺事』の余裕ある記述を生んだと考えられる。

しかし、本質的な意味では、儒者の生態を笑うという黙斎の視点は黙斎自身の「狂」の資質から必然的に生じたものである。黙斎は「狂」と自称し、「狂」そのものの生活をしていた時期があった。『先達遺事』が記されたのはその「狂」の荒れた生活がやや落ち着き始めた時期である。[24]「狂」たる黙斎はその例にもれず、世俗の規準にとらわれず自由に、またその知力によって的確に世の事象をとらえることができた。その「狂」の眼が、儒者の本質は品行方正な道学先生にではなく、言語には尽くし得ない風采をそなえた「狂」にあることを看破したのである。

そして、さらに、全てを相対化する「狂」の覚めた眼が、儒者の本質を体現する「狂」をも相対化して笑う。『先達遺事』の「狂」に漂うおかしみは、それが「狂」によってとらえられた「狂」であることに由来する。

二　「洒落」の気象

「洒落」の典型を示すとされる周濂渓をてがかりにして「洒落」の概念について確認し、次に『先達遺事』の中の「洒落」の例を検討することによって、『先達遺事』における「洒落」の性格を明らかにしていく。

1「洒落」の概念

(1)「洒落」の概念

「狂」が超俗の在り方であるのに対して、「洒落」は超俗の胸中をいう。

「洒落」という胸中の典型は周濂渓に見ることができる。『近思録』の「聖賢気象篇」に「周茂叔は胸中は灑落（しやらく）にして光風霽月（くわうふうせいげつ）の如し」[25]とあって、この部分を默斎は『近思録講義』で次のように注釈している。

灑ハソヽクト云訓ニテ水デアラフコト。落ハホロリトヲツルヤフナ底。水ノ縁モシウ〳〵シミツクハイヤナコト。水ヲサツトカケテホロリトヲチタヤフナテイハ胸ニ滞ラヌナリ。直方ノ云ヘル、コゲツカヌノナリ。ソフタイ人欲ヲ馳走スルト胸ヘコゲツク。善悪トモニ不断胸ヘ滞リテ喜怒哀楽ノハタラキガコケ付。

（『近思録講義』、聖賢気象篇）

「灑落」は、「シミツ」いた「イヤナ」ものが水で洗い落とされ、「胸ニ滞」るものがなくなった状態をいう。人欲を大目にみてゆるすと、人欲は胸に「コゲツ」いてわだかまりとなり、天理さながらの活き活きとした精神作用が阻害される。そのこげつきをきれいさっぱりとあらい流した状態を「洒落」という。

この「洒落」の胸中をさらに具体的に説明しているのが「光風霽月」である。默斎は、次のように「光風霽月」は乾いた冷ややかな心境であると述べる。

光風ハシト〳〵セヌ風ノコト、霽月ハ朧デナイコト。（中略）南風ナト云イヤナ風アルモノ。月モ児女ノ云フ笠ヲ冠フタト云ノガソレ。風モジト〳〵、月モ笠カムツタト云ハヲモ白クナイ。（中略）春ムキニヨクハレ日ニヨイ風ト云コトアルモノ。コノ風ニモソツトコフシテ居タイト云コトガアルモノ。ソレガ光風ナリ。コレヲ絲遊ト云ヤフニ説クハ望ミナイゾ。（中略）光風ハシメリ氣ノナイヲ云フ。仁ノ氣象ノトキハ絲遊ナドヽ云ガヨシ。コヽニソレハアシヽ。サテ又霽月ハツメタイ月ナリ。コンナトキ入ラサル仁氣ヲ云ハワルイ。（中略）ソコヘ仁ノ滋味親切ヲ云フヨリ、サラリトヽキタイ。胸ノ中ニ人欲ガナクハヽアトハ無極而太極ナリ。太極圖ノ上ヘノ丸イナリガ身ニカタマリタユヘ塵モ灰モツカヌ。無極而太極ノナリガ胸ニナツタユヘ洒落ナリ。打見タ処、光風ノヤウニ、霽月ノヤウナリ。

（『近思録講義』、聖賢気象篇）

「洒落」の胸中は、「光風ハシト〳〵セヌ風ノコト」とあり、からりと晴れ上がったすがすがしい心境であることがわかる。それは、春の晴れた日に吹くよい風にたとえられるが、うららかな暖かさをいうのではない。「霽月ハ朧デナイコト」とあり、また、後半の部分に「霽月ハツメタイ月ナリ」とあって、「洒落」の胸中は冷たくさえきった月影のような、さっぱりした明快さを持つのである。この明快な気象が事にあたっては合理的な判断を生むのであるが、それについては3で詳述する。

また、「洒落」の胸中はあたたかな感触をもつ仁と対照されている。仁とは理、つまり太極ないしは無極そのものと化した心に満ちる生意のことである。それは、かげろうやおぼろ月夜のように、じんわりとわきおこって周囲を包み込んでいく滋味を身上としている。それに対して、「洒落」の胸中はからりと晴れ上がって、生意の快活、明快な側面をあらわしている。人欲やこだわりがさっぱりとそそぎさられて「無極而太極ノナリガ胸ニナツタ」「洒落」の胸中からは、天理さながらの快活、明快な行為や判断が生まれるのである。

(2)高踏する気象

『近思録』の「周茂叔は胸中は灑落にして光風霽月の如し」の後には、

「其の政を為すこと精密厳恕にして務めて道理を尽くす」という文章が続く。「洒落」の胸中が理そのものと化した心、つまり「体」（「本」）を指すのに対して、「精密厳恕にして務めて道理を尽くす」は、その「用」（「末」）に当たる部分を述べている文章である。

黙斎は周濂渓を理さながらの「洒落」の胸中を獲得し、そこから理にかなった具体的な行為が自然にでてくる人物であるととらえる。そして、彼のように本末精粗へだてなく体現することは一般的には不可能であるとして、次のように述べている。

ワレ〳〵シキデモ精密厳恕ハ形カラモマナバレフモシレヌガ、光風霽月ハドウモ学バレヌゾ。

（『近思録講義』、聖賢気象篇）

凡人は、本末の末にあたる「精密厳恕」を表面的に模倣することはできても、本体の「光風霽月」の境地を掌中にすることはできない。「光風霽月ハドウモ学バレヌ」。この言葉からわかることは「洒落」が先に述べた「古の狂」の風采と同様に、学問や修養を超越したところに得られる特別な気象だということである。

「狂」と「洒落」の気象を体現しているのが曽点である。曽点は「狂」の典型であり、また朱子によって「曽点が気象は固に是れ従容として洒落なり」[26]と評されている。曽点は「狂」の高い知力によって理を会得しきっている。その胸中に人欲はすでに尽き、「天地万物と上下同流」する理さながらの心境に到達しているのである。曽点は孔子に志を問われて、「沂に浴し、舞雩に風して、詠じて帰らん」と答え、孔子をして「喟然として嘆」ぜしめた。他の弟子達が、容儀を正して野望や抱負を語ったのに対して、曽点はごく日常的な楽しみを自然に語る。[27]その悠然たる応答は「古の狂」の風采を湛え、そのこだわりのない胸中は「洒落」そのものであった。

こうした「古の狂」の風采と「洒落」の胸中は、理を直感的にとらえることができる資質をもつ者によってのみ獲得される。曽点と対照される曽子は、理に対する認識や行為の水準を地道な努力によって向上させていく点において儒者の模範とされる。しかし、曽点は、学問の積み重ねや修養の努力といういわば俗っぽい階梯を飛び越えて、理をとらえきるのである。

周廉渓及び曽点を介することによって、「古の狂」と「洒落」の気象が学問や修養によって獲得されるものではなく、理に対する先天的な資質をもった者だけが達し得る境位であることがわかる。一の3の（1）で述べたように、『先達遺事』が表現しようとしているのは、こうしたいわば特権的な高踏する気象であり、そこでは学問や修養さえも俗とみなされるのである。[28]

2「洒落」の具体例

『先達遺事』に描かれた佐藤直方の姿は、「洒落」の胸中がもたらす快活さと明快さをよくあらわしている。黙斎は佐藤直方を「快活脱洒」であるとして、次のように述べている。

佐藤子、自奉すること豊麗にして、日に醇酒を飲む。快活脱洒、終身戚容無し。

（『先達遺事』、一六頁）

儒者といえば、品行方正、質素倹約を旨とすると考えられがちであるが、黙斎は「自奉すること豊麗にして、日に醇酒を飲」み楽しむ直方の「快活脱洒」な姿こそ、儒者の本質をあらわしていると考える。

直方はこだわりなく、いつも快活で、活発発地を体現したような人物であった。直方自身、いつも「凝滞」せず快活に生きることを望んで、次のように述べたという。

佐藤先生、毎に夫人に誓ひて云ふ、「吾、生涯凝滞せざるを欲す。燕居閑坐して少しく鬱色有れば、輙ち吾に報ぜよ。吾殆ど亦之れ無からん」と。

（『墨水一滴』、一四頁）

直方は夫人に自分が「鬱色」を見せるようなことがあったら告げるようにと述べたが、そうしたことはほとんどないことを見越していた。

直方は老年に至っても快活で、「アノ高年テミチン衰ル底ナシ。ニキヤカニイソ〳〵トシテ居」[29]ったという。迂斎は、直方がいると座が活気づく様子を次のように伝えている。

直方先生カソコヘ出ラル、ト一坐カニキヤカニナル。常ニ若イ気象テアリタ

（『迂斎先生学話』附録巻之一、濵見録一）

直方の「若イ気象」、つまり快活な生気が放射されて、一座が活き活きとしてくるのである。

このように生意そのままに生きる直方であったから、一般に人がもつような欲やこだわりはいっさいなかった。次の逸話は、直方が「洒落」の、こだわりのない気象の持ち主であったことをよく伝えている。

尚翁、土州の招きに応じて江戸に来る。儋輿の従僕甚だ盛んなり。佐藤、嘗て尾藩の一當路の宅に詣る。主履一人、布嚢を携ふるのみ。

（『先達遺事』、一二頁）

お伴は一人、荷物は布嚢一つの身軽さこそ「洒落」の身上であった。世間が重んじる威容や名誉、富貴とは全く異なる次元に高踏している点において、「洒落」もまた超俗の気象の一つなのである。

3「洒落」と合理性

『先達遺事』の逸話の中には、「洒落」の気象が合理的な判断に結びついていくことを示唆する例がある。「洒落」の明快さが非常に合理的な判断を生むのである。

たとえば、直方は、仏門に入ろうとする知人の意志を容認すべきかどうかという問題について次のように答えている。行達とは直方の門人永井行達のことである。

一医人の佐藤翁に師事せし者、早世す。其の妻、寡居すること三、四年なり。祝髪して尼為らんと欲し、之れを永井行達に謀る。行達、甚だ之れを不可とし、以て翁に告ぐ。翁、直ちに云ふ、「好し。紅粉の費えを省くのみ」と。

（『先達遺事』、一七頁）

知人が仏門に入る意志を示したら、思いとどまらせようとするのが儒者の一般的な態度であろう。特に、儒教的な徳目や規範の額面だけをかたくなに守ろうとする俗儒であれば、仏門と聞くだけで態度を硬化させるにちがいない。行達は「敬」の修養に努めることあつく、俗儒の域をはるかに

越えた儒者である。しかし、師に奉る手紙の逸話[30]にみられるようにやや謹厚に過ぎる面をもっているために、知人の出家について「甚だ之れを不可とし」た。

それに対して直方は、一言のもとに「好し。紅粉の費えを省くのみ」と胸のすくような応答をなす。右の文章だけでは背景にある事情が省略されている可能性があるため、安易に断定はできない。しかし、黙斎が表現したかったのが直方の判断の爽快さであるという点については異論はなかろう。行達が排仏に固執して「不可」とするのに対して、直方は「洒落」の胸中をもって、こだわりも先入観も一切なく事象に向かう。その結果、直方は、この問題は排仏云々のレベルの問題ではないことを瞬時に見抜き、排仏という論点を切り捨てることによって実に明快な判断を下すのである。それが爽快感を生む。

直方の「洒落」の心には、この問題が排仏という儒学の論点とかかわるものではないことが明瞭に映し出される。その理さながらの胸中が示すところに従えば、問題は単に「紅粉」のための出費の有無だけであるということが明らかになるのである。前述したように「洒落」とは「無極而太極ノナリガ胸ニナツタ」状態をいう。理さながらの胸中から合理的な判断が生まれるのは当然のことである。

三　「狂」と「洒落」

先に述べたように、「狂」とは超俗の在り方であり、「洒落」は超俗の胸中をいう。両者ともに超俗の気象から派生するという点においては共通しているが、次のような対照的な相違点がある。

「狂」は、知にすぐれ行がそれに追いつかない者の謂であった。「狂」が行に欠ける者である以上、その行為や態度は倫理的な規範に抵触する可能性を秘めている。そのため、「狂」という在り方には常に規範の問題がからみ、規範からの逸脱の程度と性質如何が問われる。一の2であげた具体例でも、礼という規範や儒者としての規準とのからみで「狂」がとらえられていた。

これに対して、「洒落」は二の1の（1）で述べたように「無極而太極ノナリガ胸ニナツタ」理そのものの胸中である。従って、「洒落」の胸中から派生する行為や態度は、理にかなった真正な規準を示すということになる。

「狂」には常に規範とのせめぎ合いがある。言い換えれば、規範が「狂」を生むのである。逆に、「洒落」の胸中は規範を生み出す。

また、俗との距離という観点から「狂」と「洒落」の相違を明らかにするとすれば、次のようになる。「狂」は俗との距離を保って、超俗の位置をかたくなに保とうとする。「狂」が俗世間を軽視する覚めた視点をもつのはそのためである。『處士越復傳』では、俗との距離に拘泥し、超俗の自己を保つことに心を奪われ、その結果、奇矯な行為や態度をとってしまう「狂」の姿が描かれていた。[31]

一方、「洒落」の胸中の持ち主は超俗の境地にあるが故に事象を明確に認識し、明快な判断を下すことができる。「洒落」の場合は、俗との懸隔が肯定的に作用し、それが合理的な判断や態度を生むのである。

「狂」があくまでも超俗を保って、俗から離れることを志向する存在であるのに対して、「洒落」の胸中の持ち主は、超俗の境位にありながらこだわりなく俗世間に向かい、俗世間との接触面においてその気象の特質を最も明瞭に発揮するのである。

おわりに

以上、『先達遺事』にあらわされた「狂」と「洒落」の気象について考察しながら、『先達遺事』の特質を明らかにしてきた。默斎が『先達遺事』で明らかにしようとしたのは、「古の狂」、また「洒落」という超俗の気象であった。描き出す対象が超俗の気象であるばかりでなく、その方法も「伝心写照」という離れ技を用い、また、それを描く默斎自身が「狂」として高踏する身であった。『先達遺事』は超俗づくめの儒者伝である。

一般に、儒者といえば道学先生、儒学といえば倫理や道徳という堅い印象を持つ。しかし、『先達遺事』の儒者達は、そうした世間一般の規準を超えた、超俗の在り方こそ儒者の本質的な姿であることを教えてくれる。『先達遺事』はその悠然たる風采を伝える貴重な書なのである。

注

(1)「狷」は注(20)で詳述するように、「狂」と相通じる要素を持つ。

(2)以下、拙稿「「狂」に関する考察―稲葉默斎『處士越復傳』を例に―」(『お茶の水女子大学　人文科学研究』第一巻(二〇〇五年、三月)所収)と内容が重複する部分が若干あるが、行論上の必要による。

(3)『孟子集註』巻七、七表。

(4)『論語集註』論語九、六表。

(5)『孟子集註』巻十四、十三表。

(6)『先達遺事』七頁の默斎自身の言葉である。

(7)默斎は『孤松全稿』の默斎艸一八『新屋筆録』の中で「永田、佐藤、梨木ノ類、高ゾレタ」と述べている。默斎は「高ゾレ」をさまざまな意味で用いるが、ここでは「高踏している」という意味である。この三者は高踏する「狂」の気象の持ち主なのである。

(8)『先達遺事』、五頁。

(9)『先達遺事』、九頁。

(10)『迂斎先生学話』巻之七。

(11)『先達遺事』、七頁。

(12)『先達遺事』、九頁。

(13)『先達遺事』、九頁。

(14)『先達遺事』、四頁。

(15)『先達遺事』、二頁。

(16)『先達遺事』、一六頁。

(17)『先達遺事』、二二頁。

(18)『先達遺事』、二三頁。

(19)『迂斎先生学話』巻之二十一。

(20)『迂斎先生学話』巻之二十一。「狷」は朱子によって「狷は知未だ及ばずして守るに餘有り」(『論語集註』巻七、七裏)と定義されている。知的能力が今一つで道理には暗いが、頑固に節操を守って、その一徹なることもはや変人の域に達している者を「狷」という。「狷」は節操を守ること堅いがために、また「狂」は志の高さ故に「中行」から逸脱した行為をなすが、両者ともその一徹さを評価されて「中行を得て之れに與せずんば必ずや狂狷か」(『論語』子路)といわれる。

(21)『先達遺事』、一七頁。

(22)前出の拙稿参照。

(23)『迂斎先生学話』巻之九。

(24)拙稿「『處士越復傳』解題」、『東アジアにおける儒教思想の倫理思想史的研究―「人倫」概念を手がかりに―』(科学研究費補助金研究

成果報告書、研究代表者高島元洋、二〇〇四年、三月）所収、参照。なお『先達遺事』の成立は明和元年［一七六四］年から明和四［一七六七］年、黙斎三十三歳から三十六歳の頃と考えられる。

(25) 湯浅幸孫訳註『近思録　下』（朝日新聞社、一九七四年）、三九〇頁。

(26) 『朱子語類』巻四十、三―一七一一。

(27) 『論語』先進。

(28) もちろん、だからといって学問と修養が無意味であるというのではない。学問と修養を窮めることによって、その学問と修養までが相対化されてしまう地点、つまり理に至ることが闇斎学派の目標であった。黙斎がいう俗儒とは、この最終地点が見えず、学問や修養そのものが目標になってしまっている儒者達のことである。

(29) 『迂斎先生学話』巻之十一。

(30) 『先達遺事』、一八頁。

(31) 注(2)の拙稿参照。

引用文献一覧

引用にあたって表記を改めた部分がある。

稲葉黙斎　『先達遺事』、関儀一郎編『日本儒林叢書第三巻』（鳳出版社、一九七一年）所収。

『墨水一滴』、同右。

『迂斎先生学話』、大倉山精神文化研究所服部文庫蔵［四二］。

『孤松全稿』、千葉県山武市元倡寺所蔵。

『近思録講義』、無窮会神習文庫蔵［八五五三］。

若林強斎　『雑話筆記』、近藤啓吾校注『神道大系論説編十三垂加神道（下）』（神道大系編纂委員会、一九七八年）所収。

『孟子集註』、『四書集註』（藝文印書館、一九六九年）所収。

『論語集註』、同右。

朱子　『朱子語類』（正中書局、一九六二年）。